

研究会・シンポジウム報告

2017年12月9日（土） 定例研究会報告

テーマ：「安倍一強」と揺らぐ日本銀行の独立性

報告者：上川龍之進氏（大阪大学法学部准教授）

時間：16：30～18：00

場所：神田校舎7号館 764教室

参加者数：10名

報告内容概略：

安倍政権は日本銀行から政策決定の自律性を奪って、大胆な金融緩和を実施させた。日本銀行の法的独立性が向上したにもかかわらず、なぜ政策決定における独立性は低下してしまったのか。その背景は、「政策の窓モデル」（新しい経済理論が政治リーダーに受け入れられて政策転換が起きる）、経済的要因（経済環境の変化や海外の金融当局・投資家の影響力の増大）、政治的要因（日本政治のウェストミンスター化）、日本銀行の戦略的失敗（金融緩和に消極的で景気対策に熱心でないという印象を政治家や世論に与えてしまった）、といった観点から説明することができる。

中央銀行が法制度的に政府からの独立性を保障されたからといって、中央銀行が政治や社会から完全に自律して金融政策を思いのままに決められるわけではない。

第2次・第3次安倍内閣でみられる、独立性の高い機関を首相に従わせようとする動きは、首相への権力集中を目指した1990年代の統治機構改革の帰結で、政権維持のために、自らが意図する政策を実現させようとし、その障害となる独立性の高い機関に対して、合法的に行使できる人事権を駆使して、自らに従わせようとする。

専門性よりも、トップへの忠実度によって政策担当者が決まることは問題で、政策が歪められる可能性もある。政官関係における専門性とコントロールはトレードオフの関係で、とりわけ専門性が重要と考えられる中央銀行では問題が大きいと考えられる。

記：専修大学経済学部・大倉正典

2017年12月16日(土) 定例研究会報告

テーマ：反右派運動と地下出版物事件「星火」の重要性

報告者：傅国涌氏（インディペンデント歴史学者）

コメント：翰光氏（映画監督）

日時：14:50～18:00

場所：本学神田校舎204教室

参加者：約25名

内容概略

15時から胡傑監督のドキュメンタリー『星火』（日本語字幕）を上映、16時30分から傅国涌の研究発表（通訳は土屋昌明）、そのあと翰光のコメント。『星火』は、中国1958年～60年に農村にいた知識青年らが、大飢饉の原因は人民公社などの政策の失敗だと論じる雑誌を地下印刷し、全員逮捕された事件を扱っている（土屋が翻訳して字幕をつけた）。傅国涌の報告概要は以下のようであった。

星火事件を考えるためには、まず1960年前後の大飢饉当時の農村の状況について認識すべきだ。楊繼繩『墓碑』によれば、当時の暴動は無計画で規模も小さかった。高王凌『中国農民反行為研究』によれば、人々の態度は反抗には至らなかった。

星火メンバーは、1959年12月に顧雁が『星火』の発行を提案した。彼らは、蘭州大学・知識分子・甘肅という限界を突破しようとした。星火の中心人物は顧雁と張春元である。顧雁は、平和と民主の社会主義を提案している。彼らはつながりを、蘭州大学の学生たちからそれ以外の人たちへ、天水にいた知識分子から武山の人民公社幹部へ、甘肅から上海・広州へと広げた。全国の省レベルの幹部のリストを作ろうとし、国外への連絡のために譚蟬雪が香港へ出ようとした。この動向のなかで、林昭の役割は非常に消極的だった。組織を作ることに賛成せず、宣言を発表することにも賛成しなかった。彼らのこうした行動は、できないことをやろうとする、この点にこそ彼らの行動の精神的な意義がある。反抗が存在しなかった時代に、反抗のための具体的な基地を作ろうとした点だ。彼らの思想的資源は『毛沢東選集』にある。年齢的にも20代で思想的資源が欠乏していた。それに対して林昭の読書範囲は広い。『世界各国民権運動史』、西洋の政治思想、中国古典の造詣があった。彼女の家庭環境も一般とは違う。父親は国民党の幹部、母親は国会議員にあたる役職だった。

林昭の思想は彼女の詩にみるべきだ。彼女が獄中で書いた詩には、現実の醜悪は受け入れがたく、生命をひきかえにしても美を追究するという彼女の意志がみられる。反抗が美に対する追求だった。62年にいったん釈放されると、考えを変え、「中国共産主義者青年戦闘聯盟」という組織を蘇州で立ち上げた。このため、彼女は再び投獄、懲役20年となった。もし林昭がいなかったら、星火のメンバーの行為はたんなる地方の反革命事件と扱われたにすぎず、精神的な意義を持つにいたらなかっただろう。

翰光は、香港での調査にもとづき、毛沢東は文革について用意周到だったことを示した。フロアからは、林昭の思想や、現今中国の言論の自由について質問があった。

記：専修大学経済学部・土屋昌明